

インタビュー interview

地域を支えるこれからの図書館像

住民の視点からみると、図書館は「趣味や娯楽の施設」「本を無料で借りる施設」「学生の自習室」などのイメージが強いのではないのでしょうか。しかし、改革が進む図書館では、図書や雑誌記事、新聞記事などのさまざまなデータベースが整備され、「こんなことが知りたい」「こんなことで困っている」というときに、必要な情報を迅速にかつ的確に提供し、「地域や住民に役立つ図書館」として認識されつつあります。では、本当に役に立つ図書館とはどのようなものなのでしょう。

今回は、文部科学省生涯学習政策局に設置された「これからの図書館の在り方検討協力者会議」で座長を務めた筑波大学大学院図書館情報メディア研究科の葉袋秀樹教授に、2006年3月にまとめられた『これからの図書館像～地域を支える情報拠点^{※1}をめざして～（報告）』をもとに、これからの図書館像、特に公立図書館についてお話を伺いました。

（インタビュー日 2007年12月11日）

内外の環境変化が図書館改革に

——近年、「図書館改革」という言葉がよく聞かれています。地方財政のひっ迫や地方分権という流れの中で、地域の自立を真剣に考えていくと、地域を支える情報を提供する公立図書館の役割は非常に重要だと感じています。利用者の視点に立って、いくつかの図書館では改革が進んでいるようですが、図書館をめぐるさまざまな動きを葉袋先生はどのように分析しておられますか。



筑波大学大学院図書館情報メディア研究科 教授
Hideki Minai

葉袋 秀樹氏

※1 『これからの図書館像～地域を支える情報拠点をめざして～』

「これからの図書館の在り方検討協力者会議」によって、地域や住民に役立つ図書館となるために必要となる新たな視点や方策等について取りまとめられた提言。住民の生活、仕事、行政、学校、産業など各分野の課題解決を支援する相談・情報提供の機能の強化、図書館のハイブリッド化（印刷資料とインターネット等を組み合わせた高度な情報提供）、学校との連携による青少年の読書活動の推進、行政・各種団体等との連携による相乗効果の発揮、図書館経営の改革（図書館の資源配分の見直し、職員の意識改革など）などが掲げられているほか、具体的な取り組み事例も紹介している。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06032701/009.pdf よりダウンロード可。

葉袋 多くの方々は、図書館を本を借りる施設か学生の勉強部屋として受け止めていると思います。日本では、先進諸国と比較して、本の値段が安いといわれており、そのため、例えば、公務員の皆さんは、仕事に必要な本は買ってしまふことが多いと思います。また、専門書を真剣に読む人は、線を引きたいと思うので、本を買うことが多くなります。このため、図書館では、読書好きの方がベストセラーや小説を読むという利用が多くなっていました。

ただし、かつての図書館は、必ずしも使いやすくなかったので、まず図書館を使いやすいものにして、貸出冊数を増やすことが目標になりました。その結果、かなり使いやすく便利になり、特に、子ども向けの本や小説、生活関係の実用書などがよく利用され、貸出冊数が増えてきました。この過程で、図書館の規模はだんだん大きくなってきました。

図書館が大きくなると、小説や実用書だけでなく、専門書や雑誌など多様な資料を収集するようになり、また、長時間滞在してさまざまな形で利用するようになってきました。この過程で大人の利用者が増えてきました。ある時期からよく指摘されてきたのは、平日の昼間、図書館へ行くと、調べものをする成人男性の利用者が目立つようになってきたことです。

このように、内発的な要因として、いろいろな要求に応えられる図書館になってきたことがあります。

外発的な要因には、バブル期以後の不況や地方分権政策があります。自治体では、その地域がどのように存続していくかが問われ、独自の政策が必要になります。すべての組織が生き残るためにどうすべきかを考えています。今後は、今よりも収入が減るため、仕事の生産性を上げなければいけません。大学も収入が減りますので、もっと効率的に教育、研究を行う必要があります。そうすると、知恵や知識が必要になり、調べものをする必要が出てきます。

例えば、どこかへ行く時はインターネットで路線検索をして、時間とお金を節約します。日本の社会全体が、少ない費用と労力で効率を上げるにはどうしたらよいかを必死になって考えています。社会全体が調べものをしなければいけない時代になってきたのだと思います。

図書館の改革をめぐる動きの背景には、そのような内発的な要因と外発的な要因があるといえます。

ここで、資料や情報を提供する上で、図書館が持つ特性についてお話ししたいと思います。知識や情報を入手する手段として、書店、マスコミ、インターネットがあり、最近では、インターネットさえあれば、情報が入手できるような意見も見られます。

報告でも触れられていますが、知識や情報を入手する手段としての書店、マスコミ、インターネット、図書館を比較してみたいと思います。書店には、新刊書や新刊雑誌はありますが、少し前の本や雑誌はありません。マスコミでは、最新の情報は得られますが、保存できませんし、自分で整理しなければなりません。インターネットでは、信頼性の低い情報が多く、本や雑誌の内容の多くはまだ見ることができません。

これに対して、図書館では、新聞、雑誌、インターネットによって最新の情報を得ることができるとともに、少し前の本や雑誌、新聞も見ることができ、資料や情報が分類されている点が特徴です。つまり、比較的正確で体系的な蓄積された知識や情報を得ることができます。書店、マスコミ、インターネットが提供する情報を整理し保存しており、ここに図書館の独自の役割があります。

図書館の置かれた状況も変わってきています。地方の大都市のビジネスマンに、仕事でこの図書館を使うかを聞いてみると、以前は商工会議所の図書館がトップでした。これまでは、商工会議所が独自の図書館を持っていましたが、財政が厳しくなってきたため、最近では閉鎖す

のを待っていたのでは間に合わないという危機感があったと思います。

住民の方々の中にも、図書館は大して役に立たないと思っている人がいるかもしれません。そういう人たちにもアピールして、行政や地域の住民の方々にもっと図書館はよくなるということをお伝えしたかったのだと思います。ですから、住民の方々にも一緒に図書館を改革することをお願いしています。

——第1章をあえて「よびかけ」としたのは、図書館がこれから変わっていく、改革していくためには、ユーザーにとって魅力のあるものだと理解していただくことが重要だということですね。

薬袋 そうです。図書館を評価する人々には、利用者である住民と設置者である行政機関があると思いますが、両方の皆さんに理解していただきたいのです。そして、働いている職員の方々には意識改革をしてほしいと考えています。

——行政でも、市町村長などトップが政策として図書館の重要性を意識することは大事なことです。

薬袋 そうです。ですから、『これからの図書館像』を、もっと首長や議員、行政職員や地域の団体の方などのいろいろな方に読んでいただき、図書館は地域の役に立つということを理解していただきたいと思っています。

海外との大きな違いはレファレンスサービス

——『これからの図書館像』では、先ほどのようなくつかの視点が示されていますが、そこで掲げられているレファレンスサービスについてお聞きしたいと思います。実は私も図書館にはこのような重要な機能があるということを改めて認識したのですが、実感としてそれほどサービスを受けたという感じがありません。

薬袋 一般の方々にはそのように感じておられる方が多いと思います。それは、日本の図書館の現状から見て当然のことです。基本的には図書館側の責任ですね。

外国の図書館に行きますと、入り口から見るとところにレファレンスデスクがあって、「インフォメーション」などの看板が出ています。利用者が探し物をして館内をさまよっていると、スタッフが「メイ・アイ・ヘルプ・ユー？」と声をかけてくれるなど非常に親切です。ところが、日本の場合、レファレンスデスクは、普通の利用者があまり行かない2階の奥まった場所などにある場合がほとんどです。

海外の図書館と日本の図書館で決定的に違うのは、相談する窓口が入り口から見えるところにあるか、ないかです。また、海外の図書館なら、スタッフの方が近寄ってきてくれますが、日本では座っている場合がほとんどです。

その意味では、日本の図書館にはレファレンスサービスの基本がないのです。恥ずかしいことですが、日本ではレファレンスサービスが定着していません。これは、これまで貸出を増やすことに多くのエネルギーが費やされてきたからでしょう。

雑誌・新聞を活用する

——報告では、レファレンスサービスに関して、雑誌記事や新聞記事が重視されています。

薬袋 報告の中の「レファレンスサービスの充実と利用促進」という項目では、「レファレンスサービスを通じた雑誌記事や新聞記事の検索と提供が必要である」と述べています。貸出中心の場合は、図書館の資料は本が中心になります。本が中心の図書館は、必要な本は買いますという利用者にとっては、それほど重要ではありません。

調べものには雑誌や新聞が重要です。自宅で

せん。例えば、指定管理者について調べたいと思って図書館に行きます。10冊の本が出版されていて、そのうち8冊が購入されており、そのうち評判のいい本が4冊借りられていたとします。図書館に残っていた4冊を借り、書架にない4冊を予約しても、借りている人がルールを守らなければ、その本がいつ借りられるようになるのかはわかりません。残りの2冊はほかの図書館から取り寄せてもらう必要があります。

これに対して、雑誌記事索引を使えば、日本中の雑誌記事が検索でき、その図書館にはなくても、国立国会図書館のコピーサービスを利用すれば1週間程度で入手できます。

課題解決に取り組む場合は、ほとんどの場合、期限があるので、本に頼ると、期限に間に合わないことがあります。そのような場合には、雑誌記事や新聞記事が役立ち、それを使うにはレファレンスサービスが必要になります。そのように考えてみると分かりやすいと思います。

また、本は、雑誌記事をもとにまとめられたものが多いので、最新の雑誌を見ていけば、必要な情報が入手でき、雑誌記事を集めれば、本と同じ情報が集まり、本よりも早く入手できます。

本の場合は、「指定管理者制度」などと大きなキーワードでしか調べられないのですが、雑誌記事の場合は、標題にいくつかのキーワードが含まれている場合が多いので、「指定管理者とリスクマネジメント」、「指定管理者と雇用」など、複数のキーワードの組み合わせで検索できるという利点があります。また、雑誌記事はその時々に関心の高いテーマを取り上げていますし、記事の件数や著者数も多く、一つのテーマでも掘り下げた内容の情報を得ることができます。

——では、そのようなレファレンスサービスを充実させるために、どのような課題があるのでしょうか？

薬袋 まず費用の問題です。新聞記事について

は、かつては縮刷版を使っていましたが、今は新聞記事データベースを導入する必要があります。新聞記事データベースを導入すると、その費用のために100冊以上の本が購入できなくなりますが、導入したデータベースを使いこなせば、本なら何千冊分にもなる情報が得られると考えてはどうでしょうか。新聞記事のデータベースを導入してフルに使いこなす方が、本当に困っている人の役に立つと思います。

次に、人手の問題です。貸出で忙しいからレファレンスサービスはできないという主張もありますが、困っている人々に必要な情報を案内することは重要であり、そのためにレファレンスサービスが不可欠なのだと考えてほしいと思います。このように、図書館職員の皆さんの意識改革が必要です。

今までは、本を読みたい人々へのサービスが中心でしたが、地域で課題を抱えて困っている人々に対して、こういう資料や情報があるということを案内できるように図書館を改革することが必要です。

——提供する側だけでなく、使う側もそのような使い方ができるということを知って、どんどんニーズを伝えていかなければいけませんね。需要側と供給側の相互連携を深めていくことで図書館の質が高まっていくような気がします。

薬袋 その点は最近大きく変わってきています。ビジネス支援では、自治体の担当部局や商工会議所をはじめとする地域の経済団体と一緒に取り組んでいます。また、学校、市役所、子育てサークルなどの地域の団体との連携によって、さまざまな課題を解決していこうとしています。

これらの取り組みは、図書館だけが声を上げても、なかなか広がりません。市役所や関係団体などと連携して、図書館に対するニーズをしっかりとつかんで、互いの役割分担の中でサービスを打ち出していくことが重要だと思います。

なホールや研修室があり、立地がよく、夜遅くまで開館しているといった資産があります。他のどの機関の資産と組み合わせれば、効果が上がるかを考える必要があります。みんなで知恵を出し合って、どこの資産と合体させれば、無から有を生むかを考えていくことが必要です。

また、最近では、図書館で、地域の関係機関や団体などの発行したチラシやパンフレットを展示し配付する例が増えています。図書館は、これらの団体と連携しているわけです。図書館は、老若男女いろいろな人たちが利用するので、たくさんの人の目に触れやすく、配布場所としてとてもいい場所だといえます。

空間としての図書館を活用する

——地域住民が幅広く利用するという、図書館が持っている空間の機能を活用するというです。

薬袋 それが図書館の大きな資産です。図書館は、立地条件や開館時間、認知度の高さや幅広い利用者層などの点で、地域の中では敷居の低い利用しやすい場所です。気楽に入っていける空間なので、今まで限られた人にしか届かなかった情報が広く伝えられる場所にもなります。

——立地の面でいうと、青森市などは駅前に新しい図書館ができて、館内に冷蔵機能付きのロッカーを完備したこともあって、買い物ついでに図書館を利用する人が増えています。中心市街地の活性化につながった、とてもいい事例だと思います。

薬袋 商業施設が衰退して行く中で、図書館は集客力という点でも重要な施設だと思います。課題解決支援というサービスが加われば、本好きでない人々も集まってきます。誰にでも役に立つ施設という点では、図書館が一番です。です

から、機能的にもまちの中心になり得るわけです。

——ヨーロッパなどでも図書館はまちの中心にあつて、にぎわいの一角をなしています。

薬袋 日本でもようやくその方向になってきたと思います。最近では、駅前に図書館をつくる自治体が増えていて、にぎわい創出や中心市街地の活性化などが期待されています。また、駅のそばに図書館があることで、電車を待つ間に本を読むことができるため、高校生の非行防止にもつながります。高校生に読書習慣をつけてもらう上では、駅前はとてもいい場所です。

駅前の場所や駅ビルはビジネス支援の拠点としても便利です。ビジネス支援に力を入れている静岡市立御幸町図書館は市の中心部にあり、長野県上田市には駅前ビルの中に暮らしとビジネス支援をコンセプトの一つにした上田情報ライブラリーがあります。駅前や市の中心部は利用者の調べものに適した場所です。

改革が進む全国の図書館

——お話を聞いていると、これまで図書館の評価は貸出数だったのでしたが、今はそれ以外の要素も見定めていかなければならないのです。

薬袋 そうです。貸出だけでなく、レファレンスサービスが行われているか、新聞記事や雑誌記事のデータベースが提供されているか、という要素があると思います。また、図書館の中に閉じこもっているのではなく、地域の住民、関係団体、行政と連携しているかということも重要です。



立川市中央図書館では、行政職員が持っている資料を、写真のような行政資料用のメモを貼り付けた封筒に入れてもらうだけにして、資料収集を行っている。

——北海道の図書館では、置戸町が古くから地域に密着した先進的な取り組みをしています。

葉袋 置戸町では、自動車図書館が町内をくまなく巡回して貸出を伸ばした上で、地域の産業である木工業と連携しました。最近では、滋賀県の東近江市立永源寺図書館は食と農に視点を当てた取り組みをしていて、注目されています。

課題解決という点では、行政の課題を解決する行政支援も重要です。東京都の立川市中央図書館では、不要になった行政資料を捨てることなく、図書館に送付してもらうように、図書館から職員にチラシを配布して依頼しています。その際に職員の手をわずらわせないように、市の作成資料、都の発行資料などの区分に○をつけて、封筒に入れてもらうだけで済むような工夫もしています。

横浜市中央図書館は、市議員向けに、地方自治に関する本の解説付きのリストを掲載したパンフレットを作成して配布しています。この仕事は議会事務局との共同事業です。他の部局と一緒に取り組むことによって、図書館が単独で仕事をするよりも、はるかに効果的な仕事ができます。

この2市の図書館は、市役所職員の方へのレファレンスサービスに力を入れていて、よく利用されており、高く評価されています。

大阪府立中央図書館では、『図書館へ行こう!』『そんなとき、図書館へ!』というパンフレットを作成して、図書館にはどんな使い方があるのかを案内しています。

このような取り組みを見ていると、頑張っている図書館は本当によく考えていると感じますね。

図書館運営と指定管理者制度

——北海道では、今でも図書館のない町村がありますが、中長期的に公立図書館の望ましい配置のイメージはあるのでしょうか。

葉袋 この間の市町村合併によって、見かけ上の図書館の設置率が高まっている場合があるので、その点は注意する必要があります。全国どこでも日常的に図書館サービスを利用できるようにするためには、公民館の図書室や学校図書館の一般開放などを含めて、中学校区などの生活圏ごとに図書館サービスの拠点を整備することが望ましいといわれています。中学校区というと人口8,000人～10,000人くらいに1カ所です。公民館図書室や学校図書館なども利用して、課題解決の手がかりを見つけられるような拠点をつくる必要があります。

公民館図書室では、『家庭の医学』など地域で生活する上で不可欠の本があり、インターネット端末から生活に必要な情報や資料を得られるという新しい形の図書館も考えられます。そして、あとは、もう少し広い生活圏の中に公立図書館があれば、近くの図書室で調べられなかったときに図書館に行って、読書をしたり、調べものを行うことができます。

すべての町村に図書館があることが望ましいことはいうまでもありません。図書館をつくるには、地域で図書館について学習すること、図書館の機能を果たす施設を見つけて、その機能を徐々に拡大していくことだと思います。公民館の図書室や学校図書館、その他の資料室などを利用して、図書館活動を進めていくことが必要です。



大阪府立中央図書館のパンフレット

——現在、図書館運営については、指定管理者制度の導入など、どのようにマネジメントしていくのかということが大きな課題になっています。

薬袋 指定管理者の導入について議論する前に、地域にどのような図書館をつくりたいのかを自治体が明確にすべきだと思います。この報告では、一つの選択肢として、これまでの貸出サービスに加えて、課題解決支援機能を充実した図書館がいいのではないかと提案をしています。この提案をどう受け止めるのか考えていただきたいと思います。目標がはっきりすれば、考え方が明確になります。報告には、指定管理者制度を含む管理運営形態に関する詳しい評価基準が挙げられていますので、参考にしてください。

最近は、公共図書館の研修会に指定管理者の方々も参加しているのですが、これまでのところ、この方々から課題解決支援を重視した図書館を目指したいという言葉は聞いたことはありません。これは、指定管理者は、自治体がつくりたいといった図書館を実現し、運営しますという受け身の立場にあるからだだと思います。貸出中心の図書館がよいと自治体がいえば、それを実現しますといわざるを得ないでしょう。民間企業が自前の事業を行うのであれば、その企業の持つ哲学や方針に従って運営されていくのですが、図書館は公的な施設ですから、結局は自治体の考え方に合わせることになるのだと思います。

しかし、私は、指定管理者の方々にも、課題解決支援機能を充実した図書館の実現を目指して頑張ってくださいと思います。指定管理者の方々も、ある程度の費用はかかっても本当に地域の役に立つ図書館を実現するという哲学を持って努力してほしいと願っています。

図書館は、単に本を並べて貸し出せばいい、誰でも運営できるという認識では困ります。自治体が、図書館とはどのようなものか、どのよう

に役に立つのかということをしっかり学んで、政策を打ち出してほしいと思います。

市町村合併の影響は

——一方で、市町村合併によって図書館サービスをどのように展開していけばいいのかという新たな問題も出てきています。

薬袋 図書館現場では大変苦労されていると聞いています。先進的な図書館はそれほど多くないので、先進的な図書館とそうでない図書館が合併すると、平均したレベルに落ち着いて、サービスの質が下がるからです。また、合併した場合、郷土資料はすべて保存する体制が必要ですが、うまくいっていないことも多いと聞いています。

市町村合併で重要なことは、自治体の規模が大きくなることによって、提供される資料の範囲が広がり、職員によるサービスが向上する可能性があることです。何としても、これを生かしていただきたいと思います。また、郷土資料を継承することが必要です。しかし、実際にはサービス水準が下がってしまう場合も少なくありません。先進的な図書館のお手本が少なくなってしまうのではないかと危惧しています。

——地域の情報は地域でしっかりと保存していくことが大切です。本日はありがとうございました。



聞き手 釧路公立大学教授・地域経済研究センター長
小磯修二（こいそしゅうじ）

PROFILE

薬袋 秀樹（みない ひでき）

1948年兵庫県生まれ。慶應義塾大学経済学部、文学部図書館・情報学科卒業、'72年東京都立日比谷図書館、中央図書館に勤務。'79年東京大学大学院教育学研究科へ進学。'83年図書館情報大学助手、'87年助教授を経て、'94年から、筑波大学との統合により現職。主な著書に『図書館運動は何を残したか』など。